

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01305

研究課題名（和文）平安時代の「国風」的文化現象についての発展的学際研究

研究課題名（英文）A Comparative and Interdisciplinary Study of Multiple Aspects of the Cultural Nationalising ('Kokufu Bunka') in the Heian Period

研究代表者

佐藤 全敏 (SATO, MASATOSHI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：20313182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000 円

研究成果の概要（和文）：日本史学・日本文学・比較文学・美術史・建築史・仏教史・朝鮮史などの専門家が共同研究を行い、10～12世紀の「国風文化」と呼ばれる文化現象の実態を東アジアのなかに位置づけつつ解明した。「国風文化」とは、「すでに中国では失われたり、流行しなくなっていた古い唐風の文化」と、「日本のなかにあった文化」とが並立・融合し、そこに「唐物」と「断片化したいくぶんかの同時代の中国文化」とが加わって展開していった文化だった、との理解が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界中でナショナリズム的思潮が広がっている現在、「自国文化」と考えられているものの歴史的な性格を、冷静かつ十分に明らかにしておくことが求められる。本研究の結果、9世紀末以降に日本列島上で「国風文化」（「日本的」な文化）が現れたとき、それは決して「混じりつけない純粋な日本の文化」ではなく、また同様に、「中国文化の枠組みをそのままに表面だけを日本的に変えただけのもの」でもなかったことが判明し、そこから、圧倒的な影響力をもっていた中国の周辺地域の一つである日本において、どのようにして様々な国際的要素が入り交じった独自の文化が生まれたのかを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, specialists in multiple disciplines, including Japanese history, Japanese literature, comparative literature, art history, architectural history, Buddhism history, and Korean history, collaborated closely to examine unique aspects of the cultural phenomenon known as the 'Kokufu Bunka' flourished from the tenth to twelfth centuries in Japan. By putting the phenomenon within the broad context of East Asian history, they concluded that the so-called "Japanese national culture" was a combination of "The Tang style culture that had already been lost or no longer popular in China" and "The culture that had been existing in Japan". The project, at the same time, clarified that the "Japanese national culture" was to some extent influenced by the "fragments of contemporaneous Chinese culture" as well as by the "imported Chinese goods (KARAMONO) of the time".

研究分野：日本古代史

キーワード：国風文化 唐風文化 ナショナリズム 和漢比較 唐物

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代以降、日本古代史研究の分野では、「国風文化」は本当に「国風(日本風)」だったのか、そもそも「国風」という枠組み自体に欺瞞性はないのか、といった厳しい問い直しが行われている。その背景には、第一に、「国民国家論」のインパクトにより、「国風文化」概念も国民国家の文化イデオロギーであったことが明らかにされたこと、第二に、対外関係史研究が進展し、遣唐使の停止以後のほうが国際交通・交易が活発になったことが明らかにされたこと、の2点がある。その結果、2000年代に入るところから、「国風文化」とは「中国文化の骨組みを残したまま日本で大衆化したもの」「ある意味では国際色豊かな文化」とする理解が有力になった。

(2) これに対し研究代表者は、2000年代後半に、10～11世紀の日本列島においていかに唐物が流通し、国際的な経済交流が活発になろうとも、もはや中国を絶対的規範とすることがなくなっているようにみえることに気がついた。こうした見通しを検証するため、科研費(基盤研究(C))「平安時代における「国風」的文化現象についての学際的研究」(2016～2018年度、研究代表者)を得て、国文学・比較文学・美術史・仏教史・朝鮮史・対外関係史・法制史・税財政史等々の専門家との共同研究を開始した。

その成果として、論文「国風とは何か」(2017年6月)で予備的な中間報告を行い、文化の諸領域に通底してみられる基本構造のいくつかを示した。幸い、ただちにこれに反応する研究者が多く現れ、拙論に応答するシンポジウムが京都と東京で各1回開催された(日本史研究会 2017年12月、國學院大學 2018年10月)。また「国風文化」についての論文が様々な研究者によって矢継ぎ早に発表されるようになった。私どもの共同研究の中間報告に対する疑問も多く寄せられ、「国風」的文化現象とは何かという点について、さらに精緻に、かつ総合的に検討することが求められるようになった。

2. 研究の目的

(1) 平安時代の「国風」的文化現象とはいったい何であったのかという一点をめぐって、分野・領域を異にする研究者が集結し、それぞれの立場から検討を行った上で討議する。これにより、「国風」化とみえる諸現象の本質・構造・成立過程・変容過程・後世への影響・ジェンダー構造を領域横断的に明らかにする。また、国際交易が活発化する当時の東アジア世界のなかで、なぜそのような現象が日本列島で起こりえたのか、東アジア各地域との共通点・相違点も視野に入れながら考察する。

(2) 得られた研究成果が、分野・領域の枠を超えた共通の議論の「プラットフォーム」となるよう、シンポジウム・図書刊行を通じ、関係諸領域、および一般読書界に向けて広く提示・発信する。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者・分担者・協力者が、それぞれ以下に掲げるテーマについて研究を進め、その上で年4回集合し、順次研究報告と討議を行うことを繰り返した。なお研究協力者として、稲田奈津子(東京大学史料編纂所助教[当時])、中込律子(学習院大学非常勤講師)、李宇玲(中国同済大学副教授[当時])各氏に依頼した。このように複数分野の研究者が討議を繰り返し重ねることにより、分野・領域を横断してみられる「国風」的文化現象の特徴を捉え、その構造と連動性を発見していった。また、たえず中国や朝鮮との関係性を念頭におき、東アジアの動向のなかで理解することに留意した。なお以上の過程においては、高い実証性をもつことを前提とした。

(2) 分担テーマ

- 佐藤(代表者): 9～12世紀における国制変容と国風文化成立の関係【国制史】
研究全体の前提となる基本儀式書の原本調査と翻刻
- 滝川(分担者): 9～12世紀の日本漢詩文の変容と他領域との異同【漢文学】
- 横内(分担者): 9～12世紀の日本仏教の変容と対外関係【仏教史】
- 皿井(分担者): 9～12世紀の日本仏像様式と中国文化との関係【彫刻史】
- 塚本(分担者): 9～12世紀の中国書画と日本書画【中国書画史】
- 渡辺秀夫(分担者): 9～12世紀の日本漢文学と物語文学【和漢比較文学】
- 前田(分担者): 9～12世紀の日本法制度の特徴【法制史】
- 渡邊誠(分担者): 9～12世紀の貿易制度と文化変容の連動性【対外関係史】
- 豊島(分担者): 9～12世紀の朝鮮史【朝鮮史】
- 海野(分担者): 9～12世紀の日本・中国の建築史【建築史】
- 小塩(分担者): 9～12世紀の日本・中国・朝鮮の貴族文化【文化史】
- 稲田(協力者): 9～12世紀の日本・中国の儀礼比較【儀礼史】
- 中込(協力者): 9～12世紀の日本税財政制度の特徴【税財政史】
- 李(協力者): 中国文学からみた9～12世紀日本文学の特徴【和漢比較文学】

上海在住の李氏は毎回インターネットを通じて参加した。またコロナ禍の最中には全員がインターネットを利用して報告・討議を行った。また家事・育児・介護などの両立を図り、報告・討議内容を録画して後日視聴する、あるいは当日音声のみにて参加するなど、可能なかぎり各研究者の事情に応じた研究態勢がとれるように図った。

(3) 方法論の錬磨のため、中国大陸などからの文化的波が、日本以上に断続的に、かつ大きく押し寄せてきた歴史をもつ台湾をモデルケースにして理論的検討も行った。また実際に研究代表者・分担者・協力者が台湾に出張し、その重層的な文化状況を実見するとともに、国立故宮博物院にて、同時代の日本には流入しなかった北宋時代の作品群を実見・確認することも行った。

4. 研究成果

(1) 文学分野と仏教彫刻分野にみる文化状況

文学分野と仏教彫刻分野では、文化状況の動向・変化に共通するところがきわめて大きいことが明らかになった。いずれの分野においても、9世紀後半～10世紀初頭に「唐文化」の基幹的な要素を移入・受容し終えていた。また10世紀初頭に唐が滅亡したことにより、「唐文化」という日本の貴族層の「教養基盤」が、これ以降、更新されることなく固定化されていくことが実証的に確認された。両分野においては、これ以降、同時代の中国のあり方からの離陸が本格化している。

従来、この時期の文学が取り上げられる際、和歌や仮名物語などが中心的な対象となってきたが、当時の文学状況全体を正確に把握するためには、漢詩文の世界も等しく検討対象に入れる必要があることが確認された。これをまっぴらしてはじめて、この時期の文学状況が構造的に理解できる。

当時の文学世界は、() 渡来漢文世界 (= 唐文化、日本の貴族層の「教養基盤」)、() 平安朝漢文世界 (受容の緩衝体・フィルター)、() 和文世界、という三層からなっていた。漢詩文・和文作品とを問わず、その作品一つ一つについて、この三層を意識して位置づけていくことにより、作品一つ一つを国際的な視野のものに理解することができる。

和歌世界についていえば、9世紀末に、和歌が漢詩に劣らぬ日本固有のものという価値観が明確化されてくることが再確認された。ただしその一方で、この時期には、なお漢詩材の和歌への積極的な導入が図られていることも確認された。

(2) 絵画分野における文化状況

北宋の水墨画が周辺地域にどのようにひろがったのか/ひろがらなかったのか、それはなぜなのかを比較史的に検討した。比較対象とした地域は、高麗・朝鮮・遼・金・西夏・日本。

遼・日本では北宋山水がほとんど入っておらず受容されていないこと、一方で高麗では北宋山水が直接的に受容され、また北宋を滅亡させた金では北宋山水が受容されていることなどが確認された。

こうした事例をいくつも検討することにより、少なくとも絵画様式(形と技法)は、「意味」を伴わないかぎり決して伝播することがなく、外交、ないし相当数の意図をもった人の移動などがないと文化传播が起こらないことが明らかとなった。

なお初唐文化が、中唐文化を通じて日本に流入するプロセスなども検討の対象になった。

(3) 建築分野における文化状況

平安時代に变化した建築的要素・特徴を抽出し、これを同時代の中国での变化・特徴と比較検討した。具体的には、() 平面(礼堂の付加)、() 意匠(屋根形状・組物・彩色)、() 構造(柱位置と屋根形状、長押)が検討ポイントとなった。検討の結果、これらは、(ア) 8世紀からの継承、(イ) 国内での展開、という2つの流れから発生したものであり、いずれにおいても中国からの技術・意匠の受け入れによるものではないことが明らかとなった。

これに対し、9世紀初頭までは唐の建築との影響関係がうかがわれることも確認された。文学や仏教彫刻と時期を少し異にするが、それぞれの文化分野の特性(とりわけ伝播主体の相違)が背景にあると考えられる。

(4) 仏教分野における文化状況

11世紀に宋に渡った僧・成尋に関する史料を根本的に再検討することによって、彼が「入宋した目的」「経典・書籍をめぐる交流の実態」「当地での宗教活動」を詳細に明らかにした。その結果、従来考えられていたことと相当程度異なる結論が得られることとなった。その内容は今後論文として発表される予定である。

(5) 高麗との比較

高麗について、絵画以外の文化分野を検討してみても、日本とは異なり、北宋文化の影響を比較的直接的に受けている。

ところが南宋期になると状況に変化が生じ、日本に近い文化状況になっている可能性がある。

日本と高麗との違いや北宋期と南宋期との違いは、() 中国王朝の「国力」の大きさ、() 中国王朝が漢民族か否か、() 中国の冊封に入るか入らないか、() 中国との使節通交がある

かないか、() 制度受容か文化受容か、といった5つの要素から説明し得る。この5つの要素は、当該期の日本の状況を分析する際の重要な指標となる。

(6) 「国風」的文化的文化現象におけるジェンダー構造

当該期のジェンダー構造について、まずは錯綜している論点を整理した。() 小さなもの、繊細なもの、軽やかなもの、私的なもの等を「女性性」とすることの是非、() 男性が「女性化」した、「女性的基準」によって男性が評価されるようになったとする言説の是非、() 制作者・享受者における女性の占める位置、を主な検討対象とした。

その結果、これまでの議論の枠組みは必ずしも妥当とはいえず、むしろそこで各論点の論拠として取り上げられている文化的諸現象は、別の枠組みで捉えたほうがよいことが浮き彫りになってきた。ただしその「別の枠組み」がどのようなものであるかは、なお検討を要する。

(7) 「国風」的文化的文化現象の転換点としての12世紀後半

12世紀前期、日本国内で新しい貿易形態が出現・拡大し、従来の国家的貿易管理制度が終焉をむかえる。この管理制度の消滅に連動して、12世紀後半になると北宋の文化が日本国内で本格的に受容され始める。

12世紀後半が宋文化受容の画期であることは、これまでも示唆されてきたが、それをさらに実証する事例を積み重ねた。たとえば書籍に例をとると、12世紀後半までは、北宋の漢籍は、日本に将来されても、その受容は一部の人々に限られ、またその内容はひろく規範とされることのなかったことが、医書や図書目録の分析等から導かれる。北宋が一つの参照軸として浮上してくるのは、やはり12世紀後半以降とみてよいと判断される。

(8) 「国風」的文化的文化現象とは何か

本研究は、「国風文化」について、ひとまず以下のような仮説をたたき台として始められたが、最終的にこれに合致・補強するデータこそあれ、矛盾するデータは得られなかった。すなわち、「国風文化」とは、「すでに中国では失われたり、流行しなくなっていた古い唐風の文化」と、「日本のなかにあった文化」とが並立・融合し、そこに「唐物」と「断片化したいくぶんかの同時代の中国文化」とが加わって展開していった文化だった、という理解である。

(9) 研究成果の公表

以上の研究成果の一部については、中間報告として、2021年3月に開催したシンポジウムにて公表した。幸い、日本史・東洋史・国文学・美術史・宗教史ほか諸分野の研究者が約140名参加してくださった。中国・台湾・韓国からも多数の参加があり、期せずして国際的な会合となった。また研究代表者と研究分担者1名は、吉川真司ほか編『シリーズ古代史をひらく 国風文化』(岩波書店、2021年3月)に執筆者として参画し、共同研究の成果の一端を一般読書界に向けて公表した。さらに『山川歴史PRESS』(山川出版社)の編集部への依頼により、中学・高校の先生方を対象に、研究代表者が研究成果の一端を発表した(同14号、2024年4月)。このほか、研究代表者・分担者・協力者の個別論文や口頭報告は多数にのぼる。

(10) 国内におけるインパクト

本研究グループが公表している成果に対しては、その批判を含め、幸いにもすでに多くの研究者より応答を頂戴している。本研究では、結果的に、1990~2000年代の研究とは異なる認識にたどりつくこととなったが、これに対し、従来の立場から、榎本淳一氏が精力的に論考をいくつも発表されており、同じく河添房江・皆川雅樹両氏も、研究代表者らの理解に疑問を寄せる『「唐物」とは何か』(勉誠出版、2022年)を出版された。また1997年に刊行されていた木村茂光『国風文化の時代』が2024年に復刊され、本研究における認識にコメントを寄せられている。

そうしたなか、新たに「国風文化」に関心をよせる研究者が増えており、関係論考が増加している最中である。近年刊行された有富純也ほか編『摂関・院政期研究を読みなおす』(思文閣出版、2023年)では、本研究の分担者の一人である小塩慶氏が、現時点での研究状況の整理を試みられている。なお同書の総論では、「国風文化」の研究状況について、「大陸文化を受容する日本の側の文化構造がどのようなものだったかが現在問われており、最も熱い分野の一つでもある」と紹介されている。岩城卓二ほか編『論点・日本史学』(ミネルヴァ書房、2022年)でも、研究代表者らの研究が最新の動向として取り上げられている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 佐藤全敏	4. 巻 74
2. 論文標題 早川庄八『日本古代官僚制の研究』を読む（上）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史論	6. 最初と最後の頁 1 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚本磨充	4. 巻 4
2. 論文標題 貫休「羅漢図」の時空 - 禅月大師「応夢羅漢図」と伝播する聖地 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書	6. 最初と最後の頁 149 - 191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 44
2. 論文標題 饗宴からみた日本の古代宮殿の空間構成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書	6. 最初と最後の頁 103 - 148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝川幸司	4. 巻 90 - 10
2. 論文標題 阿衡の勅答について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 1 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝川幸司	4. 巻 170
2. 論文標題 申文の文体一つ 「望請」するのは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女子大國文	6. 最初と最後の頁 1 - 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺秀夫	4. 巻 41
2. 論文標題 唐文化の受容と国風文化の創出 唐伝来の賦格『賦譜』からみた平安朝漢詩《句題詩》の生成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 万葉集研究	6. 最初と最後の頁 287 - 350
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲田奈津子	4. 巻 16
2. 論文標題 東アジア儀礼研究の新視角 「物品目録」の検討から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東西人文 (慶北大学校人文学術院、韓国)	6. 最初と最後の頁 571 ~ 595
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 滝川幸司	4. 巻 115
2. 論文標題 渡唐の心情は詠まれたのか 寛平の遣唐使と漢詩文	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語文 (大阪大学国語国文学会)	6. 最初と最後の頁 16-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺秀夫	4. 巻 復刊第29号
2. 論文標題 古典の読み方ー『竹取物語』をめぐる二、三の問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 平安朝文学研究	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊誠	4. 巻 8
2. 論文標題 日本律令国家の「帝国」型儀礼体系の解体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史人	6. 最初と最後の頁 76-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊誠	4. 巻 308
2. 論文標題 東アジアのなかの日本律令国家「唐風化」再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 4-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝川幸司	4. 巻 65
2. 論文標題 菅原道真と遣唐使(一) 「請令諸公卿議定遣唐使進止状」「奉勅為太政官報在唐僧中一牒」の再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 詞林(大阪大学古代中世文学研究会)	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊誠	4. 巻 305
2. 論文標題 日本律令国家における夷狄身分の解体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊島悠果	4. 巻 262
2. 論文標題 朝鮮における垂簾聴政権	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史と地理 - 世界史の研究	6. 最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚本麿充	4. 巻 84
2. 論文標題 江戸時代の中国絵画コレクション 近代・中国美術史学への懸け橋	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SGRAレポート	6. 最初と最後の頁 4-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻
2. 論文標題 中世興福寺の伽藍復興に見る建築の 復古 思想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築におけるオリジナルの価値 (日本建築学会)	6. 最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲田奈津子	4. 巻 3333
2. 論文標題 日本古代皇后制度的形成與中國禮制	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古今論衡	6. 最初と最後の頁 35-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 李宇玲	4. 巻 96
2. 論文標題 『源氏物語』と「秋興賦」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國語と國文學	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李宇玲	4. 巻 203
2. 論文標題 中唐視域下的平安朝漢詩流變考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日語學習与研究	6. 最初と最後の頁 78-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 李宇玲	4. 巻 第27期
2. 論文標題 『竹取物語』“窺視”場景與初唐小説『遊仙窟』之關聯考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北亜外語研究	6. 最初と最後の頁 78 - 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 佐藤全敏
2. 発表標題 歴史学からみた平安時代法制史研究の現在
3. 学会等名 第72回法制史学会研究大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塚本鷹充
2. 発表標題 「天書」と「舍利」－宋代宮廷における宗教文物と場所
3. 学会等名 宮と都の東アジア比較宗教史シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊島悠果
2. 発表標題 開京の宗教的施設と高麗王室 王室祖先崇拜の諸相
3. 学会等名 宮と都の東アジア比較宗教史シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊島悠果
2. 発表標題 11～12世紀の高麗政治社会と李子淵系仁州李氏 撰関期藤原氏との比較を視野に
3. 学会等名 東アジア后位比較史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝川幸司
2. 発表標題 詔勅の文章について 阿衡の詔勅・勅答をめぐって
3. 学会等名 第65回国際東方学会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 稲田奈津子
2. 発表標題 日本古代的殯（mogari）與女性
3. 学会等名 「東亞宗教與王權」工作坊（中央研究院「東亞文化意象的博物書寫與物質文化」主題計畫・科技部「年號與東亞古代王權」專題計畫）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小塩慶
2. 発表標題 日本古代における祥瑞とその展開
3. 学会等名 東京大学史料編纂所研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 稲田奈津子
2. 発表標題 東アジア儀礼研究の新視角 「物品目録」の検討から
3. 学会等名 慶北大学校人文学術院HK+事業団 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来 韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に」（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺秀夫
2. 発表標題 平安文学における唐文化の受容と国風化 唐伝来『賦譜』と王朝漢文学
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「国風文化」の再定義に向けて
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊誠
2. 発表標題 東アジアのなかの日本律令国家「唐風化」再考
3. 学会等名 2019年度広島史学研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊誠
2. 発表標題 日宋貿易と宋代漢籍の受容
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「国風文化」の再定義に向けて
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊島悠果
2. 発表標題 高麗王室の婚姻と政治体制
3. 学会等名 東アジア后位比較史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 豊島悠果
2. 発表標題 高麗前期の文化と中国 - 「国風文化」との比較を視野に
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「国風文化」の再定義に向けて
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 古代からみた建築史の時代区分の再考
3. 学会等名 日本建築史研究会（建築史研究の枠組を考える - 日本建築史の時代区分 - ）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李宇玲
2. 発表標題 『源氏物語』における中国文学の投影と展開 新たな地平に向けて
3. 学会等名 中国古文献の投影と展開 日本古典文学研究の新天地 中日学術会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計23件

1. 著者名 横内裕人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 280
3. 書名 京都の中世史 2 平氏政権と源平争乱	

1. 著者名 横内裕人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 698
3. 書名 宗教遺産テキスト学の創成 (木俣元一・近本謙介編)	

1. 著者名 皿井舞	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京国立博物館	5. 総ページ数 474
3. 書名 『国宝鳥獣戯画のすべて』展図録 (東京国立博物館編)	

1. 著者名 皿井舞	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京国立博物館	5. 総ページ数 411
3. 書名 『最澄と天台宗のすべて』展図録 (東京国立博物館編)	

1. 著者名 皿井舞	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京国立博物館	5. 総ページ数 158
3. 書名 『空也上人と六波羅蜜寺』展図録 (東京国立博物館編)	

1. 著者名 稲田奈津子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 488
3. 書名 古代日本対外交流史事典（鈴木靖民監修、高久健二・田中史生・浜田久美子編）	

1. 著者名 中込律子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 554
3. 書名 馬と古代社会（佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編）	

1. 著者名 佐藤全敏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 349
3. 書名 吉村武彦他編『シリーズ古代史をひらく 国風文化』	

1. 著者名 皿井舞	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 349
3. 書名 吉村武彦他編『シリーズ古代史をひらく 国風文化』	

1. 著者名 渡邊誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 464
3. 書名 阿部猛他編『郷土史大系 巻 生産・流通（上）』	

1. 著者名 渡邊誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 阿部猛他編『郷土史大系 巻 生産・流通（下）』	

1. 著者名 横内裕人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 338
3. 書名 上島享・佐藤文字編『日本宗教史 4 宗教の受容と交流』	

1. 著者名 塚本鷹充	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 696
3. 書名 板倉聖哲編『アジア佛教美術論集 東アジア 南宋・大理・金』	

1. 著者名 塚本鷹充	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 700
3. 書名 板倉聖哲・塚本鷹充編 『アジア佛教美術論集 東アジア 北宋・遼・西夏』	

1. 著者名 塚本鷹充	4. 発行年 2020年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 359
3. 書名 江川温他編 『東西中世のさまざまな地平 フランスと日本の交差するまなざし 』	

1. 著者名 海野聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北歴史博物館	5. 総ページ数 143
3. 書名 東北歴史博物館 『伝えるかたち/伝えるわざ 伝達と変容の日本建築』	

1. 著者名 稲田奈津子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 511
3. 書名 古瀬奈津子編 『古代日本の政治と制度 律令制・史料・儀式 』	

1. 著者名 滝川幸司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 280
3. 書名 菅原道真 学者政治家の栄光と没落	

1. 著者名 豊島悠果	4. 発行年 2019年
2. 出版社 景仁文化社（韓国）	5. 総ページ数 336
3. 書名 韓国中世史学会・京畿文化財団・仁川文化財団編『高麗王朝と21世紀コリアの未来遺産』1	

1. 著者名 豊島悠果	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 335
3. 書名 古松崇志ほか編『金・女真の歴史とユーラシア東方』	

1. 著者名 塚本鷹充	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 241
3. 書名 東京国立博物館・北京故宮博物院編『決定版 清明上河図』	

1. 著者名 稲田奈津子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 狭川真一さん還暦記念会	5. 総ページ数 767
3. 書名 狭川真一さん還暦記念会編『論集 葬送・墓・石塔』	

1. 著者名 李宇玲	4. 発行年 2020年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 216
3. 書名 はじめて読む 源氏物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	塚本 磨充 (Tsukamoto Maromitsu) (00416265)	東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601)	
研究分担者	海野 聡 (Unno Satoshi) (00568157)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	豊島 悠果 (Toyoshima Yuka) (10597727)	神田外語大学・外国語学部・准教授 (32510)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	横内 裕人 (Yokouchi Hiroto) (50706520)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	
研究分担者	滝川 幸司 (Takigawa Koji) (80309525)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	
研究分担者	前田 禎彦 (Maeda Yoshihiko) (80367250)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	
研究分担者	皿井 舞 (Sarai Mai) (80392546)	学習院大学・文学部・教授 (32606)	
研究分担者	小塩 慶 (Oshio Kei) (80880765)	東京大学・史料編纂所・助教 (12601)	
研究分担者	渡辺 秀夫 (Watanabe Hideo) (90123083)	信州大学・人文学部・名誉教授 (13601)	
研究分担者	渡邊 誠 (Watanabe Makoto) (90805269)	広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授 (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中込 律子 (Nakagomi Ritsuko)		
研究協力者	李 宇玲 (Li Urei)		
研究協力者	稲田 奈津子 (Inada Natsuko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関